過去の經驗の影響

或る時に於ける全意識狀態は過去の經驗の結果である。人は生れてから他人の影響及び自然界からの刺激を受けて習慣を得、次第に其の理由を覺り、種々の原則を構成する。原則と云ふものは突然成立たしめられるものでない、又其の力の强大であるのは習慣に基くからである。時としては、永い習慣に反對して働かうとする堅い意志の決せられることがあるが、之は考慮の新材料が得られ、新たに動機の衝突が生じ、更に選擇決斷の働を發せしめるからである。過去の經驗、習慣、修養等は現在の全意識狀態を構成し、現在及び將來の經驗及び修養は一層之を堅固にし又は新らしい習慣を成立たしめる。一定の習慣の繼續することが永ければ永い程一定の意識狀態が確定し、容易に動かぬやうになるのである。

教育と意志自由

意志に絕對の自由を拒絕することは教育上少しも差支へないばかりでなく、教育の可能を認める上の要件である。若し人が過去の經驗及び嘗て受けた影響に頓着なく、全く自由に決定するものであるならば、教育は何等の效果をも生じないものと云はなければならぬ。教育は善い心的材料を供給して意志を一定の方向に確定する仕事に外ならぬ。自由でない意志には責任がないから、假令不良の行を爲すものがあつても之を罰することが出來なくなる虞があると云ふ論もあるけれども、元來罰は改良を目的とすべきものであり、從つて教育的性質を有し、意志の方向を決定する爲めの手段に外ならぬ。一旦惡い方向に傾いた意志は更に新材料を供給し新影響を加へることで、他の方向に決定せしめられるのである。

品性の形式的方面と實質的方面

第五章　品性と人格

人が確守する原則を得、意志が困難、妨害又は時々の感情により動かされぬやうになると品性の成立を見るのである。然し此の意味の品性には善いものもあれば惡いものもある。故に教育では意志の進む方向にも注意し、善い方に確定するやうに努力しなければならぬ。單に確定すると云ふことは品性の形式的方面であり、其の傾く方向は、其の實質的方面である。品性は則ち形式的品性と實質的品性とに分たれる。

形式的品性

一、形式的品性　形式的品性には、第一終始一貫する意志、第二、力ある意志、第三、獨立的意志の三要素がある。確信した事は斷乎として其の實現を努め、外部の誘惑、內部の欲望又は感情に動かされて之を變更せぬと云ふことは品性の大切な條件である。而して此の事は力ある意志の始めて能くする所である。意志の力には、一時の强い反對に抵抗するもの卽ち勇氣と永く繼續する抵抗に屈しない耐久力とを區別することが出來るが、共に人生に非常に大切なものである。尙ほ人は相依り相助くることにより益進歩するものであるけれども、常に依賴心强く、公衆に阿り上官の意を迎へる如きは、意志の獨立を失ひ、無品性を表示するに過ぎない。要するに形式的品性は自己の所信を貫く强い意志である。

實質的品性

二、實質的品性　意志が道德的見解に從ふやうになると品性は實質を得るのである。故に品性は、其の實質の方面に於ては、知識の高い發展に依るのであり、諸敎科の敎授は皆其の實質を構成することに與るのである、特に修身科は直接善惡、正邪の觀念を與へ、行爲上の規則を決定することにより、最も多く此の事に關係する。惡しい方向に確定した意志も品性と云はれぬことはなからう、又純粹の美の見地からしては斯やうな品性にも多少の價値はある。石川五衞門、天竺德兵衞などは小說の主人公としては興味があり、演劇に於ては雄大を感ぜしめるけれども、倫理上には何等の價値がない、倫理及び敎育に於ては唯善い方向に確定した意志のみを品性と認めるのである。

品性と人格

品性と人格とは、密接に關係する、品性を意志の統一し確定した狀態とすれば、人格は心身の全狀態及び全活力の能く統合せしめられた狀態を指すのである。故に人格の生ずるには先づ知識現象、感情現象及び意志現象の個々の範圍其のものに於て既に統一狀態を生じ、觀念界は思考により能く聯關整理せられ、感情も亦外部からの印象及び內部の變化する心調により擾亂せしめられず、是等を超越して能く靜平の態度を保持し、意志は確定して樣々の活動を統括することがなければならぬ。個々の範圍に於ける斯やうな統一は、更に相互に關係せしめられて始めて全心的生活の統一を成

立たしめるのである、而して其の統一の中心は品性に外ならぬ、言を更へて云へば、品性にまで發達した意志の斷乎たる自發力により心身の諸作用が皆意識せられた高い目的に向ふやうに統合せしめられる時に人格を認めるのである。故に人格は品性を豫定して居る、時々の感情、衝動、欲望などに動かされて撞著した行を爲す我は不統一な我であつて、斯かる我には人格はない。個々の性能を道德的目的に用ふる强い自發力を得るやうになつて統一的我卽ち人格を成立たしめることが出來る、而して敎育の目的は實に玆に存するのである。

第六章　自我意識の發展

意志の高い發展には自我意識の進歩を條件とすることは旣に見た、因て今其の意識の發展する次第について一言しようと思ふ。

自我意識の始まり

自我意識の始まる時を明示することはむつかしい、或は小兒が第一人稱を用ふる時を其の始まりと見るものがあるけれども、之は甚だ不確實である。之を用ふる時期は小兒により違ふ、多くの兄姉の間に生長する者は獨り兒よりも早く之を用ふると云ふ事實がある。又眞に我と云ふ語を使用するやうになるには、旣に我についての思想があるものと見なければならぬ。我の意識は、我と云ふ語の使用に先立つものと見てよからうけれども、何時始めて生ずるかを決定することは出來ぬ。

自己保存の性

小兒の生活の初めに於ては自我意識はなく、唯自己保存の衝動と云ふべきものがあるのみである。小兒が飢渴により泣き、不意の音響に縮み上り、乳房を探り求め、苦味を嫌忌して避けるなどは、旣に危險を去り生活上有利なものを歡迎する自己保存の衝動の存在を示して居る、然し之は自然に生ずる所で、下等動物に於ても見ることが出來る、此の事があるからと云つて我と非我とを區別する力があるとは見られぬ。

身體的我

自我意識の最初の內容は自己の身體である、小兒は先づ自己の身體を他人の身體及び感覺し得べき總ての物と區別するやうになる。初めは視る眼と視られる物、觸れる手と觸れられる物との間に何等の區別が立てられ

ぬのであるが、漸次一には手足が常に同じい距離に在り、其の動き又は觸れる際一種の快又は痛感を伴ふことを經驗し、又其の自由に動かされ得ることを見、二には手にて自己の身體に觸れた時と他物に觸れた時とは違つた感覺を生ずることを經驗し、三には針又は他の尖つた物にて一度は自己の身體を刺し又は打ち、一度は他物を刺し又は打ち、前の場合には常に痛感あるも後の場合には斯かる感覺がないと云ふ經驗を重ねて遂に自己身體を他物と分つやうになる。顏、手、足の區別なく引搔き廻はした指は、次第に愼重に用ひられ、最早自己の身體を損傷せぬやうになり、外物の刺激に對しては啻に之を意識するばかりでなく、其の位置をも知るやうになり、又自己身體の表象を構成し得るやうになり、假令漠然ながらも我の意識を有することになる。

是等の經驗と共に、小兒は又其の手足の運動により自己の身體又は外界に於て一定の變化を生ぜしめ得ることをも經驗し、且其の事について愉快を感ずるのである。器物を破壞し、新聞紙を裂き、自ら或る音を發して喜び

又自己を一定の地位に置き、掴み敲く等の働を爲し得ることを誇とする傾がある。而して斯かる働が益多く獨立的となり、周圍に干與する能力の益大いなるに從ひ、自我意識は次第に其の漠然たる狀態を脫離して明瞭になるのである。

小兒が自己の心的經驗に氣付くやうになると心的我の發展を見るのである。小兒は外界の物が單に其の身體に觸れるばかりでなく、表象として殘り、其の物が去つても尙ほ意識せられること及び此の意識が一旦消失しても後自然に又は故意に再び現はれることに氣付くやうになる。現象は去來出沒、變化極まりないけれども、其の表象は常に內に止まり、心的生活は益豐富となり、最初の聯關なき知覺は次第に集合せしめられ、心的我が其の中心に立つやうになるのである。而して身的我が身體の運動及び外界を自由に變化せしめる働により益進歩すると同じく、心的我も其の活潑な運動、表象を自由に構成する想像の働により益進められる。

心的我の發展には社會の影響が實に著しい、小兒は早く父母其の他の生

教育上の注意

長者の心意を察する必要を有して居るもので、此の事は自然に自己自身の主觀的經驗を意識せしめることになる。如何にすれば他人に喜ばれることが出來るか又は他人が今如何に感ずるかを知るについて小兒は自分の爲すべきこと又は自分の狀態を考へない譯にゆかぬ。小兒は、まだ自分の內に自己の行爲の判定者としての我を認めて、それに對する責任を感じ得ない、唯自己が一定の擧動をなした時に他人が之に對して如何に考へ如何に感ずるかを氣遣ひ得るのである。生長者でも自我以外に自分の行動の判定者を認める傾がある、自我を主體であると同時に對象とし、他に褒める人なく責める人がなくても、自ら自分の功を認めて滿足し、自ら其の非を責めることは、餘程進んだ人の始めて爲し得る所である。

右述べた所に從ふと身心を自由に活動せしめ之を强健ならしめることは自我の意識を發展せしめる最初の條件である。次には優秀な行爲を認めると同時に不合理な行動に對して斷然制限を加へなければならぬ。自己の缺點を知るのは改善の始まりであると云ふことは眞理である、故に少年には自分を他人と比較する機會を與へ自覺の狀態に至らしめなければならぬ。何時までも人の毀譽、褒貶に動かされるは弱點である。自我は自我により判定せられ、是認又は非難せられるやうにならなければならぬ。故に外面の賞罰は漸次減少せしめるのが至當である。斯やうにして過去、現在の我の不完全な狀態から抽象して完全な我を構成し之を實現する爲めに努力する狀態に至らしめることが實に敎育の目的である。

模倣の特點

第七章　發表運動の種類

一、第一節　模倣

吾々は故意に又は無意に樣々の發表運動をする、而して其の運動中模倣に屬するものが多い、次に此の事について見やうと思ふ。

刺激に反應すると云ふことは有機作用である。生物に加へられる刺激は其の反應を發せしめる、殊に動物になると感覺器官に受ける刺激により

知覺を生じ行動を發するものである。模倣的行動は此の反應作用の一種に過ぎない、而してそれが他の反應作用と違ふ主な點は刺激と反應作用とが多少類似して居ると云ふ一事である。人が走るのを見て走り、人が帽子を被るのを視て自分も帽子を被ると云ふやうに、知覺する働と同樣の働を繰返すと云ふ事に於て模倣的行動の特點を見るのである。此の種の反應は人に遺傳的に具はつて居る、小兒の行動の多くは模倣的であつて、模倣は實に一種の衝動又は本能と見るべきものである。

模倣と動物及び人類

下等動物には模倣の働が少くない。動物には周圍の特別な事情に應ずる方法が遺傳的に確定して居つて、之を受けて生れた者は其の新らしい經驗によつて多少之を變更することがあつても、大體之を踏襲するに止まり、模倣によつて新たに學ぶ必要を有つて居らぬ。則ち動物の反應作用は確定的であり、直接であり、初めから生長者と同じい働をなすのである、動物には兩親の模範により導かれる事を要する幼年期がないと云つてよい。唯群集して生活する動物の間には反射的模倣作用を認めるだけである。人類の幼年者は之に反して永い間助けなき狀態に在り、父母又は長者の幫助を要し、其の期間に種々の關係に處するに必要な働を學ぶのである。幼年期は學ぶ爲めのものであり、學ぶには模倣に依ることが多い。故に幼年期の永いことは模倣に大いに關係がある、模倣が人の進歩發展の上に大役を務めると云ふのは此の事を指すのである。

順應の手段としての模倣

模倣は第一、順應の手段として價値がある。人類の幼者は長期間父母又は他の保護者の膝下に生長し、其の爲すことを要する働を總て指示せられる、幼者は則ち生長者の働を見、之を眞似て漸次其の熟練を增進するのであつて、後の大いなる發展の基礎は模倣に於て存するのである。若し人が總ての順應作用を初めから自ら爲さなければならぬならば、祖先よりも一層高い又新らしい發展をなすことが出來ぬであらう。模倣は社會的遺傳の手段である、社會に於ける習慣、信仰、道德、言語及び學術は多く模倣により代々傳達せられる、故に模倣は個人の發育期の間のみでなく、其の生活期を通じて非常に重大なものであり、新たに生れ出でた者が周圍に適應する

を得るについての手段である、從つて又社會の進歩發達にも缺くことの出來ぬものである。模倣は第二には解釋の手段である。他人の働を能く理會するには、之れを模倣することが大切である、他人が如何に感じ、如何なる目的を有つて居るかを知るには自ら其の人の働を眞似て之を繰返して見るに如かぬ。他人の働く通りに働き、他人の言語を繰返すことにより、吾々は其の人の見地に立つことが出來る。歴史及び文學を學ひ、又他國民の風俗習慣等を學ぶ際に、演藝が大いに役立つのは此の事に由るのである。兒童をして時々古英雄の地位に立ち、其の言行を模倣せしめ、又は名士の辯論を模して實地に演述せしめることは、過去の死んだ事實を再び活躍せしめて兒童の經驗内に入らしめ、從つて其の理會を進めることが多い。諸學校で行はれる學藝會などに於ては此の點に大いに注意する必要がある。

模倣の發展

模倣は發展して漸次高尚な形のものとなる。最初の模倣は單に衝動として發現し、感覺的刺激に對する機械的反應である。然るに二歳になつた小兒は既に多少目的に從つて模倣するやうになる、則ち他人が爲すことを故意に模倣しようとし、他人の用ふると同じい方法に從はうとする。又初めは見聞した事を直ちに發表する反射的模倣であり、甚だ不精密な未熟なものであるが、知覺作用から次第に觀念作用を發展するに伴つて模倣も精巧になり、且單に個々の行動を眞似るばかりでなく、大體の方案を模するといふ方向に進むのである。

觀念に從ふ模倣

尚ほ最初の模倣は直接の知覺に從ふものであるけれども、後には觀念作用によつても生ずる、則ち嘗て見聞した事を思ひ出して眞似ることになり、讀み又は聽いた言行をも模倣するのである。兒童に於ても吾々は其の言行を指導する理想の存することを認める。而して其の理想の源となるものは、第一、文學に現はれた人物、第二、歴史的人物、第三、兒童が直接に知り又は讀み又は聽いて知つて居る現在の人物である。其の孰れが最も有力であるかは兒童の性により又其の生長の時期により違ふ。同一類の人物でも兒童發達の程度が違ふと模範とせられるものに差異がある。男兒が小兒期から少年期に至るまでの時期を通じて模範として擇ぶ人物は勇氣あり

冒險的事業に成功した者であり、靜的な隱忍な氣風の者でない。桃太郎、八幡太郎、源義經、上杉謙信、加藤清正などは學齡以前の子供でも知つて居り、鬼ヶ島征伐、八艘飛び、虎退治などは兒童が遊戲として屢爲す所である。

斯やうに、少年は概して勇壯活潑な動作を好み、之を模倣する傾があるから、敎育に於ても之に應ずる必要がある。特に男兒の敎育者は、自ら强壯であり、勇氣に滿ち、自ら良い模範となると同時に文學及び歷史からして、義俠愛國、不屈不撓の精神の好模範を示さなければならぬ。尤も兒童の生長するに從ひ、曾に赫々たる威名、外面に現はれた壯烈の行動ばかりでなく、隱れた所に於て人に多く知られない貴重すべき行動の存することをも知らしめる必要がある。

、模倣と敎育

最後に「反對の暗示」と云ふことについて一言する必要がある。今兒童に向つて何々の行動を爲してはならぬと命ずると、彼れは却つて其の行を爲すことがある。之は一には人に於て早く發現する抗爭的本能又は好奇的本能に由るのであらうけれども、一は確かに模倣に由るのである。則ち或

「反對の暗示

る行動の觀念が暗示せられ、之に從ふ行を發せしめるのである。「斯く々々の行動は爲してはならぬ」と命ずる時、屢其の「爲してはならぬ」と云ふ命令の力よりも「斯く々々の行動」と云ふ言の暗示力の方が强いことがある。勸善懲惡を目的とする談話が、却つて惡行爲を發せしめる刺激となるのは此の事に由る。故に敎育上先づ惡例を示して其の惡むべきことを覺らしめようとするのは甚だ危險な方法と云はなければならぬ。兒童はこれまで全く知らなかつた事を聽き、其の暗示を受け且抗爭的好奇的本能をも發する虞がある。不正な行、醜惡な事實は之を知らしめてから戒しめるよりも、遠ざけて出來得る限り永く知らしめぬ方がよいのである。

第二節　言語的發表

發表運動中の重要なものであり、又模倣に依ることの著しいものは言語的發表である。言語は人が自己の心的經驗を外界に知らしめる目的のものである。而して此の目的は身體の運動により、又音聲により達せられる

態語

のであつて、此の區別に從ひ態語と聲語とが分たれる。

態語は聲語の代理として作られたものでなく、聲語に先だち、之よりも一層原始的のものである。而して態語に於ける運動は實物の形と實際の運動とを模倣したものであり、從つて發表と其の意義との關係が音聲的發表よりも一層直接である。聾啞は自然に之を用ひて外界との交通を試みるが其の自然の儘では甚だ不十分であるから、聾啞教育に於ては手及び指の種々の運動及び其の結合、身體の異なる位置及び態度に基いて既に餘程精巧な記號が構成せられて居る。然し記號は如何に巧に作られても、態語は到底完全な言語となることは出來ぬ。

聲語

聲語は唇、舌、口蓋、喉頭部の聯關運動により生ぜしめられる音聲的發表である。音聲は其の種類に於て雜多である外、強き、高さ及び速度に於て變化が自由である爲め、種々の事物、觀念、感情、意志及び其の相互の關係に對して符號を供給する盡きざる源となることが出來る。其の外、耳に對する刺激は最も容易く注意を惹き、又音響は如何なる方向から來ても受取られ、闇黑な場所に於ても差支なく、急速に繼續して來ても辨別することが出來る爲め、聲語は思想を通ずる最も適當な手段である。殊に抽象的思想を保持し且發表するには之に優る手段はない、故に聲語の發達と思考力の發達とは親密に關係する。用語の不十分なのを見て、直ちに之を低能と斷定することは輕卒であるけれども、心的作用上の障害が言語上の故障と相應することの多いのは明かな事實である。

聲語上の缺點

聲語には前に掲げた諸器官が關係するが其の中樞は腦に在る。故に是等の部分に缺點があると用語上の種々の變態を生ずることになる、其の最も甚だしいものは失語症である。失語症には、感覺的のものと運動的のものとがある、前者は言語を解する力がなく、節調あり意味のある音を唯噪音として聞くに過ぎない、後者は言はうと欲しても全く發語することが出來ぬか、又は精々個々の語を聯關なく發し得るに過ぎないものである。

聲語上の變態

片言、吃及び啞も亦著しい用語上の故障である。片言は幼兒には普通の事である。其の聽覺器官の不完全と發語器官を支配する力の不十分なの

とにより、正確に音を聽くことも出來ず、又之を模倣することも出來ぬのは、寧ろ自然である。然し生長して後にも尙ほ或る音を發し得ないと云ふのは確かに變態である。

吃は、言語の調節器官の非常に複雜な運動が其の順序を誤まることから、不隨意的に發語の行詰る狀態であり、多く一語又は一句の始まりに於て生ずる。其の際又屢調節筋肉に痙攣的運動を發し、顏面、肩及び腕の運動をも伴ふことがある。普通、子音の發音に變態を生ずるので、之が長く引かれるか又は次の音を發する前に、急速に續けて繰返されるかである。又其の變態の度が時により違ふ、一時は何等の變態の無いことがあり、突然不良の狀態に陷ることがある。身體上の小異常、他人に對する時、期待しなかつた返答などは困難を生せしめる。之に反して自語し又は歌ふ時などには何等の缺損を認めぬのが普通である。吃の一原因は身體的である、扁桃腺の膨大、腺病、鼻の病氣、頭部の損傷及び神經の烈しい刺激が其の原因になる。然し其の主要原因は心的のものである、故に其の治療も主として心的であることを要する、則ち先づ自信の念を强めしめることに意を用ひ、母音を長く引いて話すこと、深呼吸を練習せしめること等が大切である。

啞は生れながら聽覺を缺くか又は早く聾となつたかにより生ずる狀態であつて、他人の言を聽くことが出來ぬから、自分も之を模倣して學ぶことが出來ぬのである。聾啞敎育に於ては夙に態語を用ひ、聾啞が自然に用ふる身振りを精巧な記號に構成し聲語の缺乏を補つた、然し近頃はこれで滿足せず聲語をも使用せしめることになつた。聾啞は多く發聲器官に故障を有して居るものでないから、他人の話す際の口の狀態を熟視せしめて、其の運動を模倣せしめることで能く聲語を發せしめることが出來る。此の方法は記號法に比して確かに優秀なものである、然し全然記號を用ひないやうにすることは未だ容易に望まれぬのである。

第三節　遊戲的活動

遊戯の性質

幼者の活動は遊戯の形に於て最もよく現はれる。普通に遊戯を働其のものに於て興味あるものとし、之に反して働以外に或る他の目的を以て行はれるものを作業又は仕事として居る。然し作業又は仕事でも其の働其のものゝ快である爲めに爲される場合があるから、心理上では、遊戯を作業又は仕事から區別しない、唯一般に愉快に感せられる働の種類と見るのである。又吾々は遊戯が兒童に於て衝動として存するのを見るが故に、之を衝動的又は遺傳的行働の種類と認める。

遊戯の理

遊戯的活動は何の爲めに生ずるかについて種々の説がある。或は之を休む爲めのものとし、或は之を活力の充溢に由るものとするが、孰れも單に或る場合の遊戯を解するに適するだけで、遊戯を全體として解するに足りない。兒童は遊戯に於て心身を勞することが多い、決して休む手段としてのみ遊ぶことはない。又活力の溢れるやうにならぬと遊戯の働がないと云ふことも事實に反して居る、弱い兒童、病中の少年でも遊戯を爲すことを見れば、此の考の不十分なことは明かである。現今遊戯の理論として最も有力なものは、スタンレー・ホールとカール・グロースとの説であらう、前者は遊戯を以て種族の過去の經驗が個人生活上に復現したものと見、後者は之を將來の生活に必要な能力の發展の爲めのものと見て居る。兩者共に理由はある、個人は其の一生に於て種族の過去の經驗を繰返すと云ふことは大體に於て正當であるから、種族の過去の生活狀態が幼者の遊戯に於て現はれると云ふことは否定出來ない。幼者が弓矢を弄ぶを好んだり、爭鬪の眞似をして遊んだりするのは種族として斯やうな武器を以て實際爭鬪して居つた時を復現するのであると考へることは出來るであらう。然しそれが將來の生活に必要な性能を養ふことにならぬとは見られぬ。尤もスタンレー・ホールも、種族が一階段を經過して次の高い階段に進む通り、幼者も遊戯に於て一定の本能を十分に發現せしめることで次の高い階段に進むのであると云つて居るけれども、其の進むのは遊戯に於て、未開時代の性が十分に働かされることにより盡滅せしめられる爲めであると見、遊戯に於て爲される種々の働が、後の生活に利益ある性能を養ふことを輕視する

のは首肯することの出來ない點である。動物界の遊戯を見ると、最も明かに後の生活に役立つ力の練習の爲めであることが分る。

遊戯の發展

幼者の發展するに從ひ、其の遊戯の種類の變化することは事實である。幼兒期と兒童期と少年期とに於て爲される遊戯の主要性を擧げると次の通りである。

幼兒期の遊戯

幼兒期を生れてから五六年間に相當するものとすれば、此の時期は始めて種々の力を得る時である。運動及び用語の力が生じ、感覺も發達し、腦も急速に發育して殆ど其の最大限に達する。斯やうにして幼兒は次第に世界を知り之に適應する方法を學ぶやうになる。此の時期は主として動物的生活の時であり、智力の高い發展を見ない、唯感覺器官と筋肉とが諸方面に働かされ、新世界が驗せられ、體力が試みられ、各衝動は直ちに發表せられる。幼兒はまだ苦痛を忍んで務める程度に達しない。彼れは其の好む所に從つて働き、又種々の運動を發することが其の愉快とする所である、故に此の時の全生活は遊戯に外ならぬのであり、又其の遊戯は簡單であり、玩具も粗末なものでよいのである。要するに幼者は蹴り打ち敲き投げることにより其の力をためし、之に必要な球、棒、石片、箱、太鼓等を弄び、同時に之により物體の性質をも知るやうになる。此の時期の終りになつても、同樣の活動繼續し、益其の力を强め、其の範圍を廣めることになる。則ち公園又は山野を駈け廻り、飛び、登り、探檢し、採集し、斯くして動植物界を知るやうになる。其の遊び方は組織立つたものでなく、形式的でなく、自由に欲する所に從つて行はれるのである。而かも遊戯の價値は、主に其の形式的でなく自由である點に於て存すると見てよい。幼兒の遊戯は實に其の發展の殆ど唯一の手段である。

兒童期の遊戯

次の六箇年程の間は兒童期と云はれるのである。此の時期の初めには齒牙の變更があり、八歲頃になれば腦は其の生長を終り、外界に適應することが益確實になる。遊戯に於ては此の期の終りになるまでは著しい變化を認めぬが、少年期に移らうとする頃になると、特に男兒に於ては烈しい種類の遊戯卽ち大いなる筋肉を活動せしめるやうな運動的遊戯が選ばれる。

競走、擬戰、玉投げ、野球、氷滑り、水泳、相撲などが此の時に屢見る遊戯の種類である。

少年期の遊戯

少年期に著しい點は社會的本能の發達である、個人的競爭が尙ほ大いに行はれると同時に又共同して働き、組と組とで競爭することも次第に多くなる。其の外、前の時期に於て既に爲された模倣、構成、探檢、採集等に關する遊戯が一層巧みに又大仕掛に且冒險的に爲されることをも認めるのである。而して遊戯が共同的に爲されるやうになると、それが更に社會的精神の發展に大いに關係することになり、一致、協力、誠實、克己等の價値ある性能を進めるに適するのである。

遊戯と教育

遊戯は一般に幼者の自然に傾く所であり且特に幼兒期及び兒童期に於て世界を知り、力を練るに最も必要な手段となるものであるから、教育に於ても遊戯を利用することは最も經濟的であり、又最も有效な方法である。故に學齡以前の者は主として遊戯により導く方がよい、而して眞の遊戯としては自由なものであることを要する、形式及び規則によつて制せられてはならぬ。今日の幼稚園に於ても今一層自由遊戯を多くし、手技などは成るべく制限した方がよいと思ふ。然し學齡以後に於ては、一方に於ては遊戯を行はしめると同時に他方では漸次嚴格な仕事にも從はしめ、兩者を混同しないやうに注意することも亦必要である。

第四編　心的疲勞、個性及び心的異常

第一章　心的疲勞

疲勞は心的作業に伴ひ生ずるものであり、又其の作業の上に惡影響を及ぼすものである。疲勞が強くなると心的作業を全く效のないものにし、過勞の結果が兒童の全心身生活の上に永續する損害を殘すこともある。

疲勞の原因

生理上から云へば、疲勞は神經系統の效力及び奮發力の退減であり、其の原因の一部は、物質の消費により生ずる有毒物の爲め神經が損害を受けることであり、一部は神經細胞が其の活動により消費したものが補充せられぬことである。

疲勞の影響

意識は單一であるけれども其の個々の作用は疲勞狀態を異にする、則ち或る種の心的作業は最も多く疲勞を生ぜしめ、他の種の心的作業は最も多く疲勞に抵抗すると云ふことがある。注意作用は疲勞の影響を受けることの最も著しいものであるが、復現及び觀念上の諸作用、判斷なども容易く之により動かされる。疲勞が進むに從ひ觀念は次第に其の內容を失ひ、進行が不活潑になり又斷片的になる。感情も疲勞により鈍くなり、刺激に對する反應が弱く且少くなる、然し疲勞が非常に强くなると却つて反應の增進を見ることがないでもない、疲勞者が强い響により甚だしく喫驚し、其の結果を永く心調上に滯留せしめることがある。

學校生徒と疲勞

學校生徒について見ると概して體質の弱い者は敎授により疲勞し易い、過度に疲勞する傾のある者は心身上他よりも後れた者である。筋肉力の弱いこと及び榮養不良、不幸な家庭關係、疾病等の不良な事情の下に在る者は疲勞し易い、假令心的天性の優良な者でも體質が弱いと疲勞に傾き易い。年齡も亦疲勞に關係がある、幼若な兒童は年長の者よりも多く疲勞する、六歲位では半時間の授業後に於てすら疲勞の徵候を示すが、十三四歲になると第三時間の後に始めて著しい疲勞狀態を示すのである。今日の學校生活と家庭生活との懸隔の甚だしいことが初學年の兒童をして多く疲勞せ

しめる一原因であるかも知れぬ。特に體質の弱い幼若な生徒は特別の級に分けて教授する方がよいと云ふ說も一考する價値があると思ふ。

●勞研究の必要

疲勞の研究は教育上大切なことで、日課の配當、授業時間の長短などは此の研究の結果によつて定められるべきものであると思ふ。然し不幸にも其の研究はまだ區々の意見を一定せしめるまでに進んで居らぬ。次に多少參考となる一二の點を擧げて置く。

疲勞と課業

朝餘り早く授業を始めるのはよくない、午前七時の始業は早や過ぎる、睡眠が不足な時は疲勞が速かである。最も困難な課業は第二時間目に置き第一時間には之よりも稍容易いものを置く方がよい。第一時間には尙ほ適應集合を要することが多いから課業其のものに熱中することが不十分である。數學が最も困難な課業であり、體操及び唱歌も同じく疲勞せしめることの多いものであつて決して休養の手段とはならぬ、之についで困難なのは言語、實科、技能科と云ふ順序である。一授業時間の適當な長さは年齡により違ふ、六七歲の生徒には三十分、八歲には四十五分が適當である。休憩は疲勞を防ぐ上に價値があり、又作業の時の進むに從ひ休憩の時を永くしなければならぬ、然し休憩が常に必ずしも有效なものではない、集中及び適應が之により妨げられるから、屢休憩して授業時を餘り多く切斷するのはよくない。休憩時間には新鮮な空氣に於て靜かに運動せしめるのが最もよい、而かも完全な休養は睡眠により始めて得られるのであるから、睡眠不足は心的作業上最も有害である。良き榮養は一時疲勞を止めることが出來、身心の作業の交代も亦一時的效果を生ずる。身心の働は相互の疲勞を消却せしめるものでない、唯作業の變化の爲め一時的興奮狀態が生じ、之により一時作業の質が善くなることがあるけれども、兩者の疲勞は繼續し、決して相殺するものでない。

疲勞と教育

教育に於ては兒童をして練習により次第に疲勞に抵抗し得しめることが必要である、疲勞せしめることを恐れて常に輕い仕事に從はしめることは却つて何事にも容易く疲勞する性を養ふことになる。年齡、程度、體質等につき適當な參酌を加へた以上は課業に全力を用ひしめ、最善を盡くさし

めることがなければならぬ。鍛錬は身體の方面に於けると同じく心的方面に於ても必要である。

第二章　個性

個性の多樣

吾々は既に個々の意識狀態を見た、然るに此の個々の意識狀態は孤立して存在するものでなく、多樣に聯關結合して居り、又其の各狀態の質及び分量が人により違ふから、單に分解的に研究するだけでは不十分である。諸元素の混合から成立つ個性の種類を明かにすることにも注意しなければならぬ。實際、人の性は十人十色であつて、身體の方面に於ても精神の方面に於ても同じいと云ふ人を見ることは出來ぬ。而して個性に從つて教育的影響に應ずる仕方が違ふのであるから個性を明かにすることは特に教育上大切である。

個性の分類

人性を區別することは古くから試みられた所で、上古に於ては人體内に在る液體の種類に從ひ四氣質を區別した。近世になつては、液體が氣質に關係すると云ふ思想はなくなつたけれども、氣質の名稱は引續き用ひられ、感情及び意志の反應、發動上の差別を示すものと見られて居る。例へばカントは氣質を感情的のものと活動的のものとに分ち、其の各種を更に興奮的のものと解弛的のものとに分け次のやうにした。

ヴントと氣質

感情的氣質	活動的氣質	
興奮的	多血質	膽汁質
解弛的	黑汁質	粘液質

ヴントは感情發動の强弱と其の變化の遲速とを四氣質に結合して次のやうな區別を立てた。

	迅速	遲緩
强	膽汁質	黑汁質
弱	多血質	粘液質

エッビングハウスと氣質

エッビングハウスは稍見方を違へて樂天性と悲觀性との差別及び狂暴的活動性と隱忍的耐久性との區別を氣質に配合して次のやうにした。

	狂暴的活動性	隱忍的耐久性
悲觀的	膽汁質	黑汁質
樂天的	多血質	粘液質

斯くの如く氣質の見方は人により違ふ。一體人の性が四種に纏めて見らるべきものであるかゞ疑問である。又之を感情及び意志の狀態の上の區別と見るならば、個性上の區別の一部分であるに過ぎない。個性を區別するについては尙ほ知識上の差異をも明かにしなければならぬ。故に現今諸種の典型を區別することが試みられ、人性上の元素的差異についての研究が進められて居る。

知識上の典型

人が有つて居る樣々の性質中で、特に容易く、僅少の誘因によつて發現するものがある、之が其の人に於ける固有の性である。此の性は人により餘程違ひ、又同一の性が異なる人に於て異なる强さを示すのであるから、個性研究では是等の點を明かにすることが必要である。吾々は既に觀念に典型のあることを見たが、其の他知覺又は直觀上にも典型がある。一物を其の個々の性に於て捉へるのみで、其の相互の關係又は全體に對する關係を見ない性があり、又之に反して能く其の關係に注目し個々の點よりも全體としての構造及び形體を主とする性があり、又其の觀察する物に樣々の感情調を附加する性がある。モイマンは第一のものを記述型と云ひ、第二のものを聯結型と云ひ、第三のものを感情型と云つて居る。注意について見ても、一には同時に多數の事物を包括する布延型と一事物に結合する集合型との別があり、第二には妨害する刺激に抵抗し得る型と容易く誘動せられる型とがあり、第三には一樣の强さで永く繼續する型と速かに疲勞する型とがあり、第四には適應の速かな型と徐々に且勤勞して漸く適應する型とがある。學習上に於ても、第一には機械的に言葉通りに習得する型と內容を能く捉へ論理的關係を明かにする型との別があり、第二には分解的學

習型卽ち先づ全體を見、個々の點を全體の一部として學ぶものと總合型卽ち先づ部分を見、之を結合附加して全體を構成するものとの區別がある。

其の他感情及び意志上にも種々の典型がある、モイマンに從へば次のやうな區別を立てることが出來る。

感情上の典型

感情上の典型　(イ)樂天性に富み爽快の心調の强いもの——悲觀性の强く不愉快を感ずることの多いもの。(ロ)鋭敏な興奮し易い感情性——强健な容易に感動しない性。(ハ)深く且持續する感情性——淺く且速かに消却する感情性。(ニ)不動的心調、確定的情性に富むもの——變動多く、悲喜の更代急激な型。(ホ)行動を惹起する活潑な情性——受動的であつて內に滯留する情性。

意志上の典型

意志上の典型　(イ)有力であり、活動的であり、貫徹しなければ止まぬと云ふ型——薄弱無力であつて僅少の妨害にも抵抗し得ない型。(ロ)原則に從ひ一般的目的により導かれる型——依るべき原則なく、場合に從ひ、一時の思ひ付に從ひ決定する型。(ハ)目的を覺り、遠き慮ある型——現在のみを見、直接の目的を追ふ型。(ニ)大膽であり決斷の迅速な型——躊躇し容易に決しない型。(ホ)冷靜に思慮し著實に判斷して決する型——感情により導かれる型。(ヘ)習慣に從ひ、慣れた行動を變化せしめない保守的意志——新を迎へ奇を求める意志。(ト)活潑であり、容易く奮起し、行動を喜ぶ意志——不活動な怠惰な意志。(チ)獨立的自覺的意志——指導を必要とし、容易く動かされる意志。

典型研究の必要

典型研究の必要　典型を明かにすることは個性を知る上に必要であり、從つて敎育上にも大いに價値がある、然し唯雜然種々の典型を列擧したゞけでは科學的研究とは云はれぬ。典型を發生的に攻究し、或る性の特に發展するやうになつた原因を明かにし、又一定の性は常に或る性と相待ち相助けること及び或る他の性とは常に相反對し相容れざる傾あることをも明かにすることで、其の研究が餘程科學的となり敎育上にも一層多く參考となるものを與へるのである。此の點の研究はまだ幼稚であるから、今後尙ほ心理學者、敎育學者及び敎育家の努力を要することが多い。

第三章　心的異常

第一節　夢及び催眠狀態

心的異常の存在

身體に畸形があり、生理作用にも人により變態がある通り、心的狀態に於ても、時として又人により異常のあることを免れぬ、而して昔は之を理外のものとし、唯不可解のものとして居つたが、今日に於ては其の生ずる所以を明かにし、心的異常と並行する身的現象を探究し、最早理外のものゝ存在を認めぬのである。

夢

夢すらも昔は不思議と見られ、夢に於て精神は身體の束縛を離れるものとせられ、從つて夢想は空間及び時間の狹ひ境界に制限せられた覺醒的意識よりも優れたものと見られて居つた。然し今日では少くとも教育ある者は斯やうなことを信ぜぬ、覺醒した時に於て容易く身體的障害を壓迫する有力な意志が、夢に於て却つて退滅し、外部感覺及び變化する聯想の偶然の刺激により樣々の夢想が發し、消化不十分、心臟の故障、呼吸困難などが其の原因として有力であることを認めるやうになつた。

夢中行動

夢の一種類であり又神經系統の病的に興奮した狀態の徵候となるものは夢中行動である。兒童及び大人に於ても屢見る寢言は其の豫備的階段であると云つてよい。覺醒狀態に於ては、絶えず意識上の發現と意志的發表との間に聯關がある、而して此の聯關は發語に關する筋肉の上に最も多く成立つのであるから、夢中に於ても言語上の發表が容易に生ずるのである。夢中行動に於ては普通の睡眠に於けるよりも外部の刺激に對して興奮することが强い。行動者は一程の度までは外物を覺且認知する、然しそれが直ちに錯覺になるのである、或は窓を出入口と思ひ、壁を押入と誤認し、方向を誤る等の戸惑をするのが普通である。常に能く慣れた簡單な仕事は此の狀態に於ても爲し得られる、然し複雜な困難な仕事は夢中に於て爲し得られるものでない、數學家が夢中行動に於てむつかしい問題を解いたと云ふ話はあるけれども眞實ではなかからう。

催眠狀態

夢中行動より一歩進んだものは催眠狀態である。之を生ぜしめる刺激を暗示と名づける。暗示は普通他人から命令の形で發せられる言語、身振、動作であり、一定の心的狀態を傳達、移植する働である。時としては自己の意識に發現する一定の觀念により全意識の支配せられる場合もある、之を自己暗示と名づける。暗示に應じ易いと云ふのは神經の特別な性質に因るのであるけれども決して病的とは認められぬ。又催眠狀態は反復により次第に强められるものであり、暗示は屢繰返されることにより最初何等の效果を及ぼさなかつた人に對しても有效になるのである。一樣な感覺上の弱い刺激は暗示の補助となる、例へば一物を視つめるとか、皮膚を摩擦するとかすることは、一には注意を弱め、一には自己意志の獨立を障止する影響を活潑に意識することを助けることにより、間接に暗示の補助となるのである。

第二節　神經質

神經質の特徴

神經質は小兒に於ても見る所であり遺傳的特性である。小兒に於ける此の性の著しい徴候は高まつた心的興奮及び激動の傾向である、則ち僅かな刺激により烈しい情を發し、心調の變化が甚だしく、忽ち爽快となり、忽ち悲哀に沈み、忽ち怒り、忽ち元氣よくなると云ふ有樣である。斯やうな性の小兒は都會に多く、其の原因は遺傳の外、榮養不良、新鮮な空氣の不足、慢性胃腸病、重い病氣(チブス、ジフテリー)、睡眠不足、心的過勞等である。

神經質の兒童は、同年齡の他の兒童と交際することを好まぬ風がある、又屢彼等の嘲笑の的となつて益其の神經質を增進せしめるのである。過度の恐怖性の結合する場合も少くない、少しの音にも驚いて蒼白となり、永續する臆病狀態を生じ、殊に闇黑を恐れ、日暮に近づくに從ひ暫らくも獨りで居ることが出來ぬ傾を示すのである。長泣と不眠との結合は神經質の小兒及び兒童の最要徴候の一である、非常に疲勞し、欠呻し、眼を擦り、睡眠を求める樣子があつても、之を寢に就かしめようとすると再び活潑となり、激しい運動を始め、遂に全然疲勞し、甚だ不靜穩な眠に就くやうになる、則ち物に

驚き、泣き、寢言を云ひ、屢身體を動かし其の位置を變ずるのである。恐怖的傾向は屢强迫觀念の出發點となり、擧動を輕卒にし、潔癖を生じ無意的に目的のない種々の解決し難い問を發する傾を發生せしめる。時としては一定の恐惶狀態例へば廣い場所を見ると直ちに車に轢れはしないかとか、轉倒しないかとか云ふ心勞に耐へられぬやうな狀態を示すことがある。

身體的異常

斯かる心的異常には身體上の異常を伴ふ、頭痛、齒軋、慴され驚くこと、烈しいヒステリー的發作、顚倒、筋肉の硬直、過度の運動等である。

兒童の神經質

幼兒期に見る神經的疾病は、遺傳的のものであると云ふけれども、病氣が直接に遺傳することは甚だ稀であるから、神經質に傾き易い性向が遺傳すると云つた方がよい。斯かる性向を受けた幼兒は之を傳へた神經質の父母により敎育せられることにより性向を實際の性質にならしめるのである。兒童を同年齡の者と交際せしめぬこと、其の想像を不健全な讀物により興奮せしめること、自然の發展を不自然に早めて人工的に早熟の氣風を養ふことなどは、總て此の疾病の增進を助けるものである。

低能兒の特徵

第三節　低能

低能とは心的能力が同年齡の他の者よりも著しく劣等な狀態であり、腦に於ける病的狀態に關聯して居るものである。小學校に於て兒童の低能を鑑定するには最初二箇年を最も重要な觀察の時とする、而して此の事については校醫と敎師とが共に意を用ふる心要がある。低能兒童には先づ注意力の上に著しい障碍を認める、則ち其の區域が非常に狹く、多くの感覺範圍からの感覺を一觀念に結合し、又は部分的觀念を一全體に集合することが困難である。場合によつては注意が急速に下降し、意識の明瞭の度は退減し、又は常に一事物から他の或る觀念に轉移し、一定の事に專心することが出來ぬ、一物を其の唯或る外部的特質のみにより他の物と區別し得るに過ぎない。一般に知的作用は健全な兒童に比して遲く且疲勞することが速かである。從順、名譽、正義、感謝等の抽象概念は低能の兒童には空言に外ならぬ、故に判斷推理の働に於て成功することは稀である。

低能兒の感情狀態

感情狀態を見ることは低能を認定する上に大切である。健全な兒童は其の感覺に主として快感を伴はしめ、唯痛感を不快とするものであるのに、低能兒童には不快の情昂進し、泣き易く、直ちに不機嫌となり、容易に驚愕し激怒し易くなる。殊に一定の感情的意志的狀態及び行動の著しい衝動的發現を認める、例へば何等の目的なく諸方を徘徊し、出校もせず、家にも歸らぬやうなことがある。一方に於ては臆病で利己心が強く、怠惰で執拗な性質を見、他方では絶えず虚僞に傾き、惡意を懷き狡猾であり、猥褻な談話をなし、盗癖あり、竊かに人畜を虐するやうな性行を見るのである。尙ほ斯かる生徒は全學校期を通じて記憶が惡しく、非常に勞して得る知識を直ちに再び喪失してしまい、教師をして其の教授を進めることが出來ず、常に初めから繰返す必要を感せしめる。多數の低能兒童は過度の興奮性を有し、輕卒な衝動的狀態を示すものであるけれども、又全然無頓著であつて殆ど何事によつても動かされぬと云ふ遲鈍な靜穩狀態に在る者もある。

低能の原因

低能の原因としては遺傳性の外、兩親の飲酒癖が主なものである、其の他結核、梅毒、神經及び精神上の疾病も亦低能の原因になる。尙ほ幼時期に於ける榮養上の障害特に幼兒に多い胃腸上の病氣は身體の發展を妨げ、特に幼年に於て活潑に生長する腦に有害な結果を生ずるものである。斯かる小兒には多く齒牙の發生後れ又歩行の時も後れる。中央神經組織上の障害例へば痙攣及び小兒麻痺は、低能の直接の原因となるものである。

白痴と其の原因

第四節　白痴

腦の慢性的疾病の爲め、知識、感情及び努力の狀態に於て殆ど救ふことの出來ぬ低能を認めることがある、之を白痴と名づける。其の原因は低能の場合と略同じい、則ち其の一は遺傳である。或る家に於ては代々精神的退歩を示し遂に白痴を生ずる明かな階段を認めることが出來る。佛國の醫師モーレルの示す所によると退歩の第一歩は神經質、道德的退歩、無節制の狀態であり、次の代には發作の傾、重い神經的疾患、飲酒癖となり、第三代には更に心的障害、自殺、心的低能を生じ、第四代には生れながらの痴鈍、不具、其の

他の發展上の障害を生ずると云ふ順序である。飲酒も亦低能の主な原因である、尙ほ姙娠中に負傷するとか虐待を受けるとか心情を激動せしめたとか云ふことが胎兒に影響し、其の心身の發展を損害することが多い。其の他兩親及び祖父母の精神病、肺病、梅毒、血族結婚、心身上の異常等も先天的原因の主なものである、後天的原因としては腦の損害卽ち機械的震盪及び强い恐怖を感ずる如き心情の激動が其の主なものである。

白痴の身體的異常

白痴には著しい身體の畸形の伴ふことが多い。頭部が過大又は過小であり、下腭部にも變形多く、手の長きに過ぎ直立して居つて膝の下まで垂れるものがある。齒牙の發生遲く、歩行も後れ、自分の意で立つことが出來ず、歩行を試みる際常に轉倒する者が多い。

白痴の感情

白痴の感情に於ても病的現象を認める、一體、快不快が甚だ不鮮明であり、時としては健全な人と全く反對の狀態を生ずることがある。例へば健全な人には非常に不快な嗅覺及び味覺が明かに快感を生ずる。白痴中には好んで自分の大小便の臭氣を嗅ぎ又は之を食する者すらある、皮膚の感覺も鈍く、負傷しても痛を感じない者も少くない。又殆ど感情を有つて居らず、必要な食物を得る時でも滿足を感じないものもある、

白痴の意志

意志も非常に弱く、衝動すら有つて居らぬものもあるが、多くは衝動的であり、榮養衝動强く、食物を視ると直ちに掴み食ひ、或は盜み食ふことあり、運動衝動も病的に昂進し、自動的に數時間も手又は身體を一樣に動かすことがあり、又時としては引搔き、裂き、嚙むと云ふやうな働をなし屢自ら傷けることがある。

低能者と用語

用語上の故障については既に述べたが、白痴及び一般に低能者には之が特に著しい、普通の二歲か又は三歲の頃までの兒童に於て生理上の原因から生ずる缺點が、低能者には後年にまでも繼續する。低能兒は概して遲く用語の力を得るものであり、其の度に應じて發語的缺點の階段を示して居る、白痴中には不明瞭で解し難い語を用ふるものが少くないのである。

低能兒の教育

低能者を教育することは個々の不幸な人を救濟すると云ふ人道的見地からして必要であるが、吾々は尙ほ進んで國民を知的道德的及び身體的退

歩から救ふ爲め低能の原因を究め之を改良することに努力しなければならぬ。其の教育に於ては普通兒童の教育上の原則を一層精密に注意し確守するを要する。則ち教育には聯絡協同を要するが、特に低能兒の教育に於ては心的方面の教育と養護とが密接に關係せしめられ教育者と醫師とが協同に努力することを要する。個別的に教育せよと云ふ原則も低能者に對しては特に大いに注意せられなければならぬ。心的虛弱者の教育は徐々に進み反復練習を要することが特に多いから普通兒童と共同に行ひ難い。又其の虛弱の種類も多く、身體上の缺點の主となる者もあれば、心的缺點の主となる者もあると云ふ有樣であるから、是等を精密に調査して適宜の處置をなさなければならぬ。尙ほ感覺練習を教育の基礎とすることも非常に大切である、運動練習、觸覺、視覺及び聽覺の練習について特別に注意することが如何に白痴を導く上に有效であるかは、近時モンテッソリー女史により示されたのである。獨立して働き自治するを得る狀態に導くことを努めと云ふ原則は不幸にも低能兒に對しては普通兒童に對する程容易に行はれ難い、低能者は助を要することが多く、殊に白痴は永く養育保護の下に立つ必要を有して居る、然し其の教育の目的は、出來る限り社會生活の準備をなさしめ、作業を進め實用の能を得しめ、勤勉、清潔、秩序及び忍耐の風に慣れ自信の念を發展せしめると云ふ點に在るのである。

結論

心理學と教育

心理學は心的事實を明かにする學であるから、人を知ることを要する事業は總て之に依るのである、殊に直接兒童を導き青年を教訓する人は心理上の知識を缺くことは出來ぬ。而して特に教育に關する方面の心的事實を攻究するものを教育的心理學と名づける。

被教育者を知る必要

教育者は第一、被教育者の性質を知らなければならぬ。其の身體については神經及び筋肉について知り、又其の發育及び活動の條件を明かにし、身體諸機關と其の健全な作用の條件とを知る必要がある。斯かる知識は主として生理學の供給する所であつて、此の點に於て教育は生理學の基礎を要する。而して心的方面に於ては知識感情及び意志上の諸現象を明かにし、個人の精神發展の狀態ばかりでなく、人類種族及び國民の發展狀況をも知らなければならぬ、此の點に於て教育は心理學の基礎を要するのである。

教育的作業の性質を知る必要

第二、教育者は教育と云ふ仕事の性質をも知らなければならぬ。教育が進むに從ひ、如何なる變化が被教育者の上に生ずるか、一定の刺激は如何に受納せられるか、如何なる影響が最も有效であり、如何なるものが無效であるかを明かにする必要がある。而して此の事についても一層根本的な心理上の知識卽ち心的作用の發達條件の知識が必要である、則ち心的作用は周圍に適應することにより發達すること及び其の適應力が人の發育の時期により違ふことを知り、又遺傳の事實及び勢力に關する攻究に依ることが大切である。斯くして吾々は教育者の働の效力及び限界を見ることが出來る。

教育の個々の方法と心理上の知識

第三、教育上の個々の方法を決定するについても心理的知識が必要である。被教育者の性質及び教育作業の本質が明かになれば、方法を決定する上に參考となることが多いけれども、教育のやうな多岐に亘る仕事に於て個々の方法を盡く一般的理論から抽出して來ることは出來ぬ、必ず特別な觀察及び實驗的研究を要する、殊に個性及び心的變態に關しては一般の理論を適用し難いことは明白である。此の個々の學習及び作業に於ける心的作用及び特殊の性質を明かにして、個々の適切な方法の依るべき點を供給するのが、教育的心理學の主な務である。

教育者と心理的研究

要するに少年を教育するものは少年を知り、自己の働の性質を知り、方法を決定するについて心理學の素養を要する。心理學が不幸にもまだ大いに教育上の參考となるものを與へる程に進んで居らぬと云ふことは之を不必要とする理由にはならぬ。尤も教育者は唯心理學者の研究の結果を

待つて居るやうであつてはならぬ、自ら教授し訓練する際に種々の實驗を行はなければならぬ。永く兒童に接して之を觀察し、之に對して種々の方法を試みることにより始めて信ずべき結果が得られるのである。

教育應用心理撮要終

大正三年九月十六日印刷
大正三年九月二十日發行

○教育應用心理撮要
○定價金九拾錢

著作者　大瀨甚太郎

發行兼印刷者　河出靜一郎
東京市日本橋區通三丁目十番地

印刷所　日清印刷株式會社
東京市牛込區榎町七番地

不許複製

發行所　東京市日本橋區通三丁目十番地
成美堂書店
電話本局　二七七七番
振替東京　一七一九番

文學士
大瀨甚太郎氏著

新撰
教育學
定價金壹圓四拾錢
送料金拾貳錢

改訂
教育學講義
定價金壹圓拾錢
送料金拾貳錢

歐洲教育史
正編定價金貳圓五拾錢
送料金拾八錢
續編定價金壹圓廿錢
送料金拾貳錢

教育書と心理書

勅語衍義（增訂）
文學博士　井上哲次郎氏著
定價四拾錢　送料拾貳錢

小學校教育汎論
文學士　大瀨甚太郎氏閲
文學士　菊池俊諦氏著
定價廿五錢　送料四錢

近世社會學
文學博士　遠藤隆吉氏著
定價壹圓九拾錢　送料拾八錢

社會心理と教育
文學博士　遠藤隆吉氏著
定價壹圓卅錢　送料拾貳錢

催眠心理學
文學博士　福來友吉氏著
定價參圓　送料貳拾四錢

催眠心理學概論
文學博士　福來友吉氏著
定價壹圓卅錢　送料拾貳錢

最新式催眠術
文學士　村上辰午郎氏著
定價壹圓九拾錢　送料拾八錢

心理學（ロイス氏）
哲學博士　ジョーシアロイス
文學士　風見謙次郎氏譯
定價壹圓四拾錢　送料拾貳錢

實驗心理學
文學士　大槻快尊氏著
定價參圓八拾錢　送料貳拾四錢

320
137

落